

代が過ぎると脱農が考えられ、観光化・集約化された農業が不動産収入にささえられながら残って行くであろう。

結城市の地域性に関する考察

—農業と紬生産を中心として—

磯 前 厚 子

(1) 目的

結成は、古代から麻や穀〔ゆう〕の木がよく育つところとして、昔から農業が発達し、また、その農業と密接な関連をもって結城紬が存続してきたが、その伝統性に根ざす両者は、現在、いかなる状況にあり、どのような関連性をもつのか。また、それらによって生み出される地域的特色は何か。以上の点を最終的には地域区分を行なうことによって考察する。

(2) 枠組

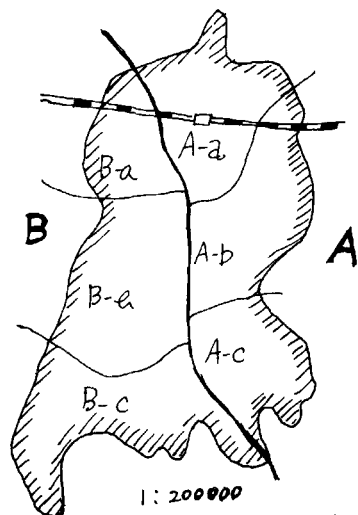
本論文の枠組は、まず第Ⅰ章で自然環境、人文環境の面より地域を概観し、第Ⅱ章で結城市の農業の現況を、特に兼業状態に注目して考察し、また、83枚の集落カードの詳細なる分析と地図化、特記すべき宮崎集落における戸別調査結果の分析と総合を通して、集落別状況を把握した。第Ⅲ章で紬生産地域の関東機業地域における位置づけを行ない、鬼怒川沿岸流域の生産地域を確認し、さらに結城市内部における紬従事に関する地域分化を明らかにした。第Ⅳ章においては、結論として紬と農業との関連における地域区分をすることにより、地域的特色を考察した。

(3) 結果

鬼怒川沿岸低地の砂礫地という土地条件が桑畑を存続させ、養蚕と紬の生産関係を生み、紬の技術的伝統を、藩の援助、技術者の努力、国の重要無形文化財への指定、ということによって継承させ、一千年余の伝統性を維持してきた。しかしながら、その伝統性の中においても、次の諸点に変化しつつあることを結論として指摘しうる。

① 養蚕は現在においても当地域の農業を特色づける優位部門であるが、生産された繭は、大部分がそのまま移出され、紬の原料である真綿は、その約90%が、福島県保原町から移入されている。よって原料との結びつきは減少した。

② 紬生産工程は非近代的であり、そのほとんどが手作業によるものであるが、経済発展に応じ、分業化が進んだ。また、地域分化もしており大きく製織地域と糸つむぎ地域に分かれ、前者はさらにいざり機地域と高機地域に分化し



地域区分図

た。

③ 紬生産と農業余剰労働力との関連は現在でもみられ、それは農閑期において紬生産が増加するという点でも明らかである。しかし、農業の副業としての傾向は漸減しつつある。特に、鬼怒川沿岸の中心的集落では、むしろ「紬の副業としての農業」になりつつあると言える。

地域区分をまとめると下表のようになる。

	組合加入	紬従事内容	織機	農業・その他
A-a	○	製織・染色・緋くくり	いざり機	農家率低く、紬が主体
A-b	○	製織・染色・緋くくり	いざり機	農家率高く、紬が主体
A-c	○	製織・緋くくり	高機	農家率高く、農業が主体
B-a	×	糸つむぎ	織機なし	通勤兼業多く、養蚕あり
B-b	×	糸つむぎ	織機なし	海拔30m以上、養蚕あり
B-c	×	糸つむぎ	織機なし	海拔30m以下、養蚕なし

我孫子市の都市化

井上玲子

(1) 研究の目的

東京圏の拡大に伴い、東京の南から時計回りに都市化が進み、現在は最後にとり残された東京の北東部に都市化の波が急激に押し寄せている。我孫子市は、その北東部、常磐線沿線にあって、現在、急激に変化している地域の一つである。東京の北東部の都市化が遅れた理由を考えつつ、近年の我孫子市の急激な都市化について考察することをこの論文の目的とする。

(2) 研究の枠組

方法としては、まず、東京大都市圏の拡大の中での我孫子市の位置の変化をとらえ、次に人口と土地利用の2つの指標によって我孫子市の都市化を分析し、具体的な動向を把握した上で市内の都市化の地域差をみる。この3つの段階をふまえて、我孫子市の都市化の総合的考察を試みる。

(3) 研究の結果

農村であった「我孫子」が東京近郊の住宅都市として変わっていったのは、この10年ほどの間である。都心から30～40kmのところであれば、中央線沿線や東海道線沿線では、昭和30年代半ばには、もうかなり都市化が進んできていた。しかし、我孫子市は、交通条件、地形的条件、土地選好性などの最も劣った東京東郊にあり、都市化が遅れ、農村としての位置を長く保っていた。ところが、東京大都市圏はますます拡大され、交通条件の改善などによって、都心からの方向別の都市化条件の差異は小さくなってきた。そして、昭和40年代にはいと、比較的安い土地が広く残っていて、大規模な開発のしやすい東京東郊に都市化の目が向けられてきたのである。そうした中で、昭和45年、我孫子市(当時はまだ我孫子町)にも住宅公団が進出して、都市化の大きなきっかけをつくった。昭